

序

「智に働けば角がたつ。情に棹させば流される。とかくに人の世は住みにくい」。この漱石の言葉は、教育にもあてはまるように思われる。

学問中心・認知中心——これが、十数年前「教育の現代化」の形で提出された、社会の要請であった。当時としては必要なことであったが、そのため、子どもは授業を楽しむ心を失い落ちこぼれの子を生む結果となった。この反省に基づき、文部省は、「ゆとりと充実」をめざす新指導要領を公示し、過密ダイヤの是正を図った。しかし、これは外的条件であり、これをうけとめる内的条件が伴わないと、いびつになる。つまり、子どもが授業の中で、ゆとりを楽しみ受け入れる素地を作ることが必要である。

この見地から、本校では一昨年度より「よろこびを生む授業」を主題にかかげ、より望ましい授業改造をめざし意欲的に取り組んできた。過去二年間の経験の中で、よろこびの様相をいろいろの角度から観察し、またよろこびを生む条件を設定して、望ましい人間形成の基盤となる学習諸活動のあり方について、その手がかりをつかんだ。

本来、「よろこび」は情意と深くかかわり、また「授業」は学習体験の集積である。この意味で、本年度は「情意を重視した学習体験をととして」のサブテーマをかかげ、よろこびを生む授業の具体的な姿を、授業実践の中において追求した。教師は、よろこびを生む手だてとして、たえずゆさぶりをかけ、また操作活動をうながすよう配慮した。かくして、子どもが学習にのめりこみ、夢中になってとり組む場面がいくつもみられた。

「よろこびを生む授業」の主題は広範囲の内容を含み、研究仮説の立てかた、研究の進めかたも容易ではない。それだけに、まだ多くの問題が未解決のまま残されてはいるが、一応、これまでの努力の中から得られたものを研究成果としてまとめた次第である。各方面の識者や教師各位のご高見ご指導を望んでやまない。

本年度の研究を進めるにあたり、ご指導を賜った金沢大学教育学部教官各位に厚く謝意を表する。

昭和 55 年 5 月 29 日

金沢大学教育学部附属小学校長

山 崎 豊